

熱に触れたい

工学部建築学科

129-T5754

本山 和香奈

人は、温かで穏やかなあかりに安らぎを感じ、時には元気を貰う。あかりは常に私たちのそばにいる身近な存在だ。そして建築も、人間生活の基盤となる重要な要素の一つである。身近なこの二つの異なる点、それは「熱」を感じるかどうかだと思う。建築自体には、あかりが放つような温度を感じない。暖房や冷房で部屋の空気を変えることはできても、それを包む籠は無機質で熱を放たないのだ。「あかり」と「建築」。近くて遠いこの二つを一つの作品に集約し、建物が熱を帯びることで、建築を更に身近に感じてくれたらと考えた。

「あかり」を、二つのモニュメントに溶け込ませた。この2棟にはそれぞれ「暖」と「涼」というテーマがある。二つのモニュメントは向かい合い、対になるように建っている。

線材で作られた丸みを帯びた建物は「暖」。見る人に安心感を与えるようなデザインにした。内部に粘性の液体をいれ、その中には球状の光源がいくつも入っており、液体を温める。球自体は光を通す半透明の素材でできていて、球の内側には光る物質、または微生物を注入する。この無数にある光る球のおかげで、モニュメントに触れると仄かに温かい。あかりのもつ暖光性を表現した。

対称的なのは「涼」のモニュメント。こちらも外見的な冷涼感のみでなく、実際に触れると感じる冷たさも表現した。建築材料は半透明のガラス、内部は空洞にして、その中に「暖」と同じ原理の光源が埋め込まれた溶けない氷を配置する。氷が内部の空気を冷やし、内側から伝わる熱でモニュメントの外壁は冷たくなる。あかり=温かいという概念を捨て、あかりの神秘的な魅力を引き出す空間を考えた。

季節によっては片方のモニュメントに人が集中することになるだろうが、その人の流れも面白いと思った。日が暮れるとあかりが仄かに光る様が映え、より幻想的な空間を目にすることができるだろう。

眺めるだけが建築じゃない。現代建築は特に、個人の思想を抽象的に表現する傾向が強いいためか、建築家の思いが見た人それぞれに委ねられる場合が多いと思う。もし私がこのモニュメントを建てられるとしたら、「隣に寄り添うくらい身近に建築を感じてほしい」という思いを、訪れた人全てに分かりやすく伝えたい。身近な「あかり」をモニュメントに表現することで、訪れた人々が触れて笑顔になる、心に寄り添うような空間にできたら良いと思う。

熱に触水たい

工学部 建築学科

129-15754 本山 和香奈

本体は、熱を伝えやすいから、透明なガラス製。その外部には麻糸のちぢみ糸材を巻きつける。

～光源のイメージ～
—— 光源 熱を伝える素材

薄めのガラス
内部は、光源が埋め込まれた透けない水

～透けない水のイメージ～
<正面図>

光源

